

「ドリフトする」

2025・2・12 重枝 一郎

キャリア教育発達理論はいろいろある。例えば、クランボルツの著書「その幸運は偶然ではないんです！」では、「職業選択はみんな偶然の出会いで決めている（計画的偶発性理論）」という。個人のキャリアは、長期計画に基づいてのみ歩まれているわけではなく、およそ8割は偶発的な事柄によって形成されているという。これは「いい加減でよい」ではなく、出会いや出来事をポジティブに捉えて、「おもしろそう」「自分に向いているかも」と思ったら行動しろということである。私自身のキャリアはまさにそうであるから、一つの考えとして納得できる。また、クランボルツは「キャリアデザイン」は鉛筆と消しゴムで書けという。要するに「決めても、何度も書き直せばいい」という。

私たちは、何らかの理論を頭に入れて、キャリア教育をするのがいいと思う。そうすることで、過去・今・これからをつなげて話すことができる。

さて、「キャリア教育」において、「キャリアデザイン」は重視される。一方で、ずっとデザインし続けるわけではない。つまり、節目が来た時、じっくり考えてデザインすることが重要であり、節目と節目の間は、「ドリフトする」方がよいという。「ドリフトする」とは、流れに任せたり、揺れを楽しんだりすることである。また、デザインを書き換える時は、成長や目標達成のための「よい我慢」なのか、ただ耐えるだけの「悪い我慢」なのかを自己点検させることも必要になる。この年度末は、節目と言えるので、「ドリフト」から、じっくり考えさせるタイミングといえる。

「キャリア教育」は、生徒の成長のために行う教育であることは言うまでもないが、「生徒を傷つける教育」になっていく場合があるという。児美川孝一郎氏の「ストレーターの研究」が、そのことを示す。100人の高校1年生が、入学後に留年・中退することなく上級学校に進み、順調に卒業して就職し、3年後もその仕事を継続している人を「ストレーター」と定義し、その調査をした。2012年のデータは41/100人であった。それから10年以上たった今は、もっと少ないと思う。私たち教師は、悪気ないが「ストレーター」の人生を標準であると思い、生徒にその印象を与え続ける「キャリア教育」しているのかもしれない。例えば、野球のイチロー選手が小さい頃から大リーグの選手を目指してバッティングセンターに通っていた話もそれに近い。「ストレーター」になれない生徒の自己肯定感は下がり、時に自分を落ちこぼれとってしまう。

普通のワークシートであるが、「迷った時のワークシート」という意思決定の支援がある。生徒は様々な選択肢で迷う。例えば、「大学に行くか、専門学校に行くか」「卒業するか中退するか」「理系に行くか文系に行くか」など。

学期の終わりに、来年度に向けての目標を考えさせたりすると思うが、生徒は、とりあえず教師が喜ぶような目標を書く場合がある。「迷い」を書かせることで、多少は深く考えさせることができる。

- ① 迷っているAとBを書く。
- ② Aを選んだ時のプラス、Bを選んだ時のプラス、気付いたこと
- ③ 逆に、Aを選んだ時のマイナス、Bを選んだ時のマイナス、気付いたこと
- ④ Aをあきらめたときの気持ち、Bをあきらめたときの気持ち、折衷案はあるか
- ⑤ 自分の書いたことを振り返って今思うこと（目標になるように書かせる）